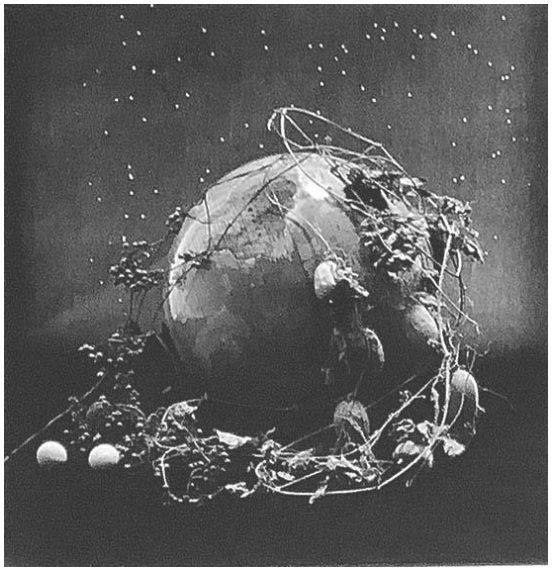
Photographic Society of
Zone System

ゾーンシステム研究会会報　Web 公開版
発行日：2020.2
発行者：中島秀雄
事務局：畑 文夫
編集部：荒井 崇

NO.69

CONTENTS

- **前進するために**
- **4×5 基礎撮影会**
- **ファインプリントのためのデジタルネガ（1）**
- **ゾーンシステム研究会第 23 回写真展作品（1）**
- **インフォメーション**



前進するために

中島秀雄

明けましておめでとうございます。

今年は暮れから大きな事件が続き、騒がしい新年となった。夏にはオリンピック・パラリンピックが予定され、スポーツの祭典にふさわしい年になることを願っている。

研究会は、12 月に第 23 回展を終えたばかりで、まだその余韻は残っている。

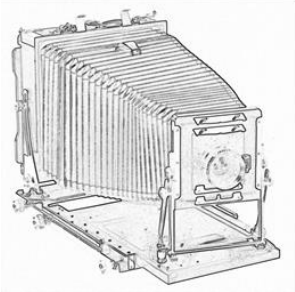
今回「都市」をテーマに加えたことで、作品に興味を深めてくれた人たちも多かった。都市は常に変化し新しくなっていく。会員にはこれからも都市にカメラを向け、新たなイメージで捉えてほしい。

私たちは銀塩モノクローム・ファインプリントを表現のスタイルとして続けてきた。ファインプリントについてアメリカの写真家アンセル・アダムスは ”人間の意識の奥底で、ある世界を揺り動かすもの”と語っている。しかし、美しい自然を見つけたからといって、それ自体が写真になるわけではなく、写真という技法によってプリントに仕上げることで写真作品になる。しかし、簡単なことではない。美しい自然風景や都市にしてもそれをどのように切り取り、どのように組み合わせるかに一人一人の創造力と技量が重要な役割となる。

私たちは絶えず観察する心と整ったカメラによる写真技術の準備は欠かせない。

私たちはすでに、23 回もの銀塩モノクローム作品展を続けてきた。テーマから撮影、ネガ現像、プリント制作、プリントの保存、仕上げまでのすべてを自らの責任で進め、新宿と四谷にあるギャラリーを中心にファインプリントとして発表してきた。両ギャラリーとも設備は整い、写真展ギャラリーとして十分な空間となっている。しかし、最近はカラー写真によるグループ展が多くなってきている。

今年は、研究会が取り組んできた作品制作に見合うギャラリーで発表することを考えたい。



4×5 基礎撮影会

－新宿御苑 2019.3.16－

浜野次郎

以前から希望の声が多かった4×5フォーマットの実技を学ぶ小撮影会が 3/16(土)に新宿御苑でおこなわれました。受講者は 4 名(葛城、大内、宮内、浜野)、オブザーバー1 名(金子)。教習内容は以下の通りでした。

被写体を注意深く観察し、ゾーンを割り付けてゆく

A. 大型カメラ操作の基本

①撮影に必要な機材

・一式をいかにコンパクトに収納するか

②大判用レンズのイメージサークル

・同じ焦点距離でも包括角度の大きさによりアオリの自由度が変わる

③撮影前の点検

・蛇腹に穴があいていないか

・シャッターの動作の確認

④機材のカスタマイズ

・ホルダー番号にあわせてフラップに刻みを入れる

・冠布に固定用の紐をつけておく

⑤撮影にあたってのカメラ操作

・水準器の使い方（ピントグラス、レンズボードの垂直の確認）

・被写界深度を利用したピント調整の手順

・絞りすぎの防止(画像の先鋭度のため)

・フードを使った時のケラレの点検

・フイルターによるトーンの調整

・露出計でどこのポイントを最初に測るか

・様々なポイントの測定からいかに露出を決めるか

・強い直射光の時の対策（ハレ切り、ホルダーへの光もれ防止）

⑥撮影後に行うべきこと

・構図やピントの再確認

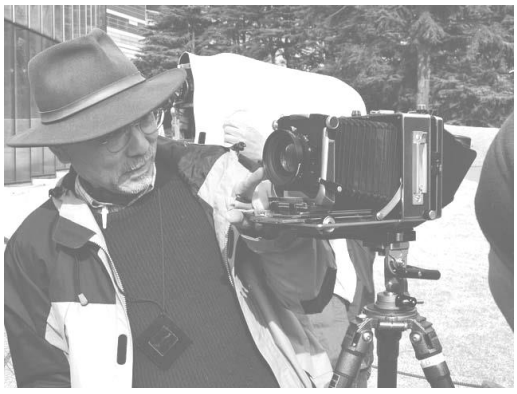
・データの記載

B. カメラセッティングの実地練習

・最初に中島代表のカメラのピントグラスを覗き、構図を確認。その後各自のカメラでセッティングをおこない、その手順やピントを中島代表がチェックした。

C. 撮影

・各自で自由に 2 枚程度撮影。当日は変わりやすい天候で、4 時頃に軽く一雨きたが、ちょうど閉門時間 10 分前くらいで終了。
なんとか予定されたカリキュラムを網羅できた。



絞りすぎに要注意…

今回の撮影会では合理的なセッティングの手順や撮影技法の基礎を再確認でき、参加者には得るところが多かったようです。ゴルフにおいて最高の上達法はプロとのラウンドレッスンであると言われ、プロがおこなうターゲットの設定のしかた、スムーズな所作、ラウンドのリズムといったものを目近で見て吸収することがアマチュアの上達に極めて効果的だそうです。大判カメラの撮影も同様で初心者よりも、つい自己流に陥りがちなベテランにこそ受講をおすすめしたいと感じました。

また珍しい機材（ポロファインダー*）や手作りのアクササリー（プアマンズファインダー**）を披露するなど、少人数ならではの、和気藹々とした雰囲気が大変よかったのではないでしょうか。

撮影機材がかさばる、重いなどの理由から大判カメラを扱うのが億劫になりがちですが、手近な場所で、短時間で参加できる基礎撮影会を通じて会員各位に 4×5 フォーマットの魅力を再発見していただければと思いました。ちなみに新宿御苑は侮ることのできない被写体の宝庫、年間パスポート 2,000 円がおすすめです。

（参考）ポロファインダー*、プアマンズビューファインダーとは**

ポロファインダーは鏡を利用した市販品。日中でも冠布をつかわず、被写体を観察することができる。

プアマンズビューファインダーは大内さんの手作り。素通しの枠とビニール製のスケールが一体化したもので、あらゆる焦点距離に対応するプレビューファインダー。撮影時これを使うと何ミリのレンズをカメラに装着すべきかが一発で決まる。光学系のビューファインダー（例えばホースマン製など）とちがい、単純・軽量・安価。

冠布いらずのポロファインダー

プアマンズビューファインダーをつかうと構図と焦点距離が一発できまる

300mm 画角

90mm 画角

ホースマン製光学ビューファインダー

ファインプリントのためのデジタルネガ（1）

畑文夫

はじめに

ファインプリントとは何か、どうすればファインプリントが制作できるか、単純明快な答えはないかもしれないが、自分がヴィジュアライズしたイメージを的確に定着することが不可欠ということだけは間違いないだろう。

アダムスの助手であったジョン・セクストンはプリントワークショップで「暗室のなかで最も重要なものはゴミ箱だ！」と言っていたが、従来の暗室作業でイメージした結果にたどり着くには印画紙を多く消費することが不可欠だった。しかし、銀塩写真の諸材料が高騰している現在、レンタル暗室を利用する人には試行錯誤の時間も大きな負担となってくる。

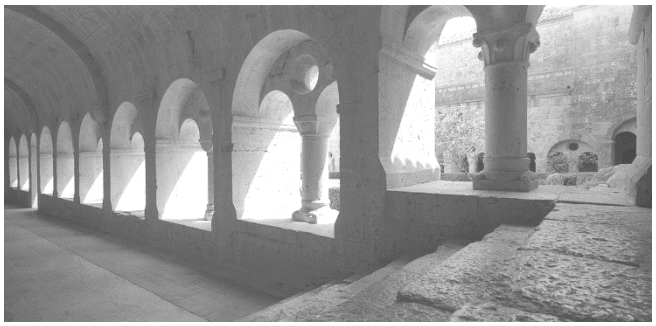
そこで印画紙のロスを減らし、かつ自分のイメージを効率的に定着する手段としてデジタルネガの応用を検討した。

印画紙の号数（コントラスト）選定、焼込み、覆い焼き、部分的な号数変更などに相当する操作は「明室」で行い、最終的なイメージがまとまったらデジタルネガを出力して暗室で密着焼する。

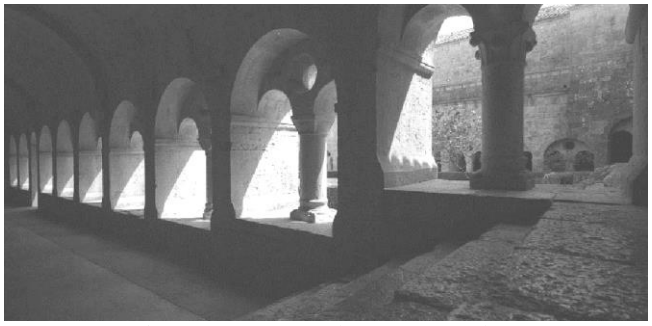
インクジェットプリントという工程が増えるが、印画紙と暗室作業の時間を節約できる効果は少なくない。

さらに右の作例にも示すように、きわめて狭い範囲や複雑な形状でも焼き込み、覆い焼き、号数の調整が行えるのは従来の暗室作業より優れた点である。

明室処理の例　〔カッコ内は該当する暗室作業〕

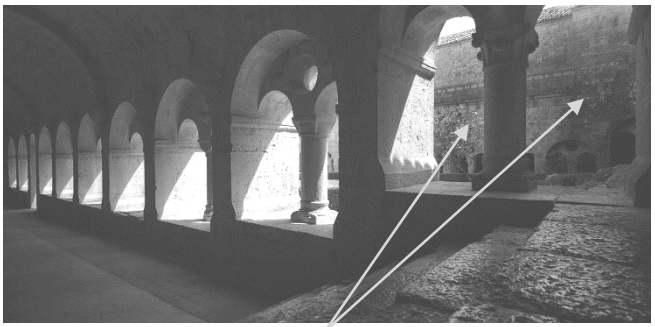


作例 1　ネガのスキャン画像 〔ストレートプリント〕



作例 2　全体コントラスト調整 〔号数調整 〕

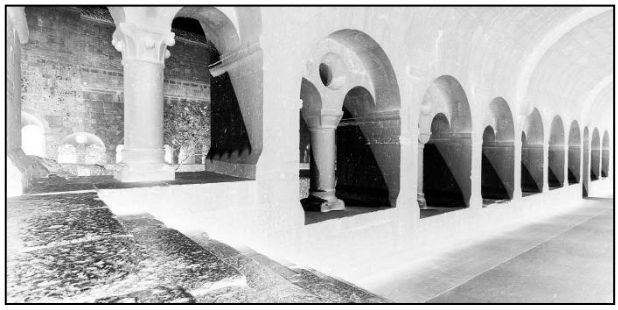
作例 3　石段のトーン調整 〔部分号数調整〕



作例 4　窓外のトーン調整 〔焼き込み〕

作例 5　左右と階調の反転

意図するイメージに仕上がったらネガに変換する。



作例 6　補正

使用するインクジェットプリンター・用紙と印画紙の特性に合わせた「補正カーブ」を予め用意しておき、デジタルネガをインクジェット出力する。これを密着焼すれば「作例 4」のイメージが得られる。

デジタルネガプロセスの概要

コンピューターのモニターで見たイメージをそのまま印画紙に再現するためには、自分の使用する機材や材料に合わせた補正が必要になる。

① 図 1 のデジタルグレースケールと Kodak Gray Scale（図 2）を用意する。（ソフトはアドビ・フォトショップを使用）

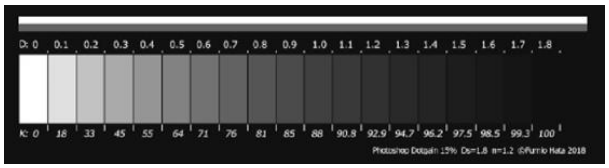


図 1 デジタルグレースケール

図 2　Kodak Gray Scale（8 インチ）

これを図 3 に示す条件で見比べ、同等に見えることを確認する。

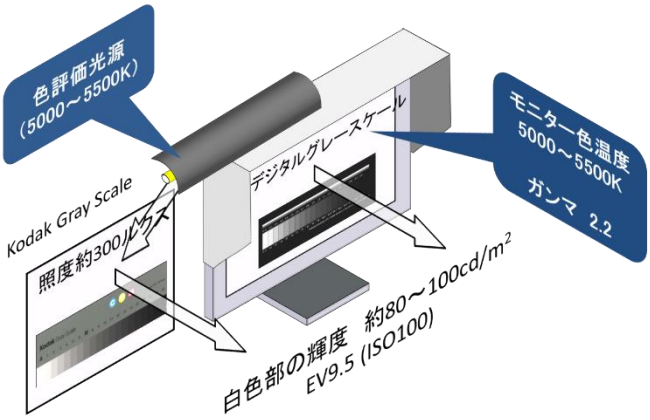


図 3　Kodak Gray Scale と デジタルグレースケールの比較

② デジタルグレースケールをフォトショップで白黒および左右反転してからインクジェット出力する。(図 4) 用紙は「ピクトリコ TPS100」など、デジタルネガ用として市販されているものを用いる。

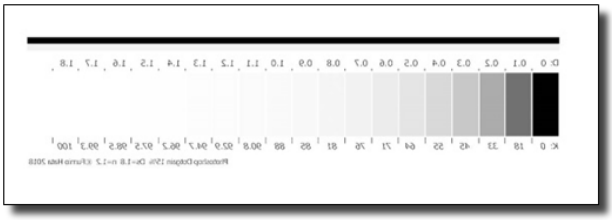


図 4 デジタルグレースケールのネガ出力

③ こうしてできた「デジタルネガ」を印画紙に密着焼する。結果はコントラストの高い、暗

部のつぶれたプリントになり、Kodak Gray Scale とは大きく異なるはずである。(図 5)

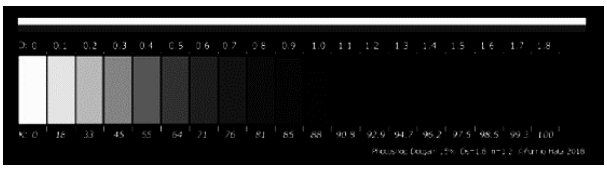


図 5 デジタルネガの「ストレートプリント」

④ この「ストレートプリント」と Kodak Gray Scale をフラットベッドスキャナーで同時に読み取り、フォトショップで反射濃度を比較測定する。その測定結果により補正用「トーンカーブ」を作る。(図 6, 7)

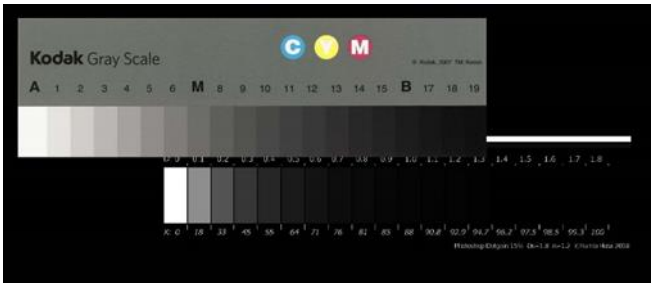


図 6　Kodak Gray Scale とストレートプリントの比較

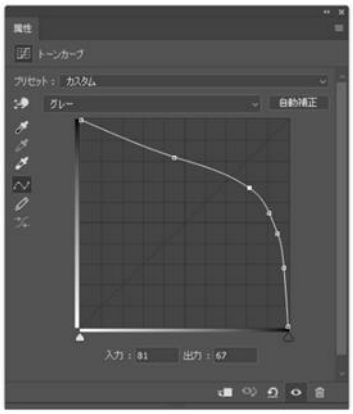
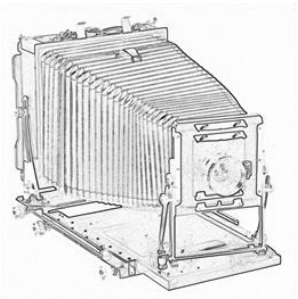


図 7 補正トーンカーブ

以降、プリントする画像にこの補正トーンカーブのレイヤーを適用すれば、モニターで「見えたまま」の結果がプリントできる。

（次回はデジタルグレースケールと補正カーブの作り方を説明します。）



ゾーンシステム研究会第 23 回写真展［光への探求］作品（1）

ポートレートギャラリー ［2019 年 11 月 28 日(木) ～ 12 月 4 日(水)］

1.

2.

3.

4.

5.

6.

7.

1.「残雪のマンモスピーク」中島秀雄
2.「パノラミック都市」中島秀雄
3.「傾いたカラフェ」浜野次郎
4.「木霊（こだま)」中澤悟
5.「White Land」中澤悟
6.「Light of Late Spring」臼井健司
7.「Persona」越後久雄

8.

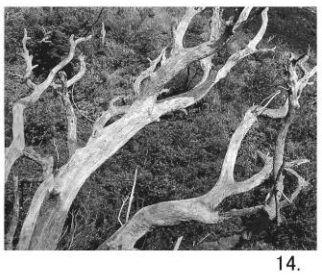
9.

10.

11.

12.

13.



14.

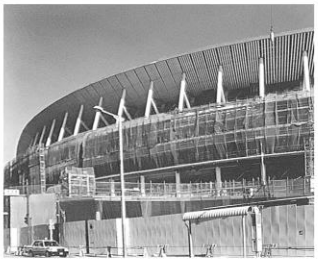
8.「ボーボリの森の中で」岡崎克之
9.「宵闇迫る」岡崎克之
10.「初夏の湿原」皆川賢
11.「a small villa」皆川賢
12.「地球の文様」葛城忠彦
13.「大都市東京」橘田功
14.「樹霊」橘田功

15.

16.

17.

18.



19.

20.

21.

15.「都市の公園」宮内廣仁
16.「パラボラ（電波塔)」宮内廣仁
17.「Niagara Falls」金子正道
18.「Toronto」金子正道
19.「2019 東京」長谷川勇夫
20.「白いカサブランカ」鈴木武志
21.「宙（そら)」鈴木武志

（注）その他の作品は次号に掲載

Information

【トピックス 】

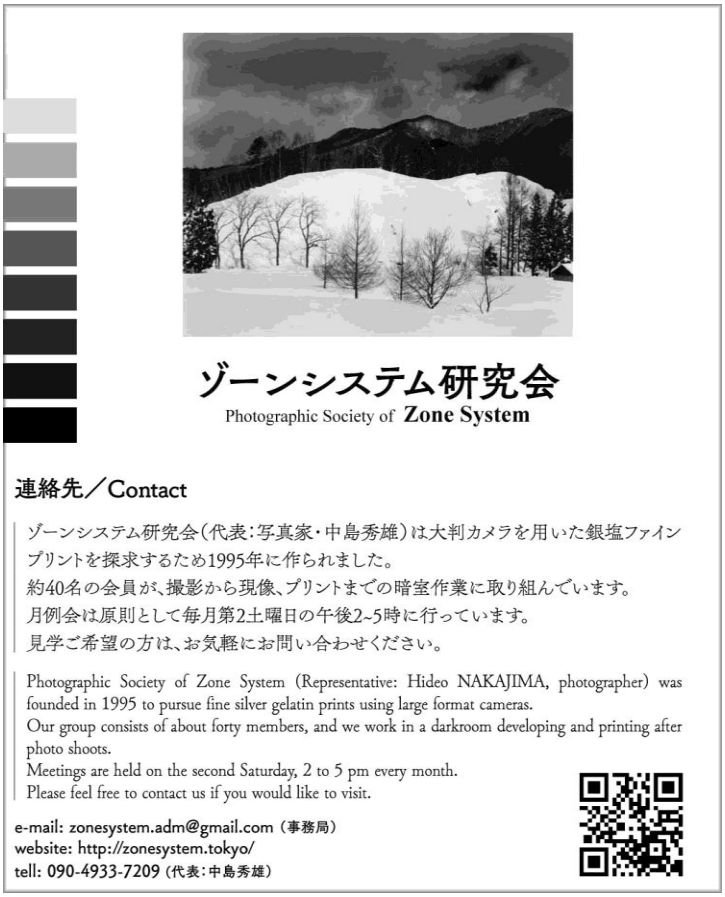
[名刺判ゾーンシステム解説パンフレット]

昨年研究会は、ゾーンシステムの解説を掲載したパンフレットを制作しました。

2 つ折りにするとちょうど名刺サイズとなり名刺入れ等に収納できます。また、スマホで研究会 HP を見るための QR コードも掲載。更に、英語も併記されていますので、外国の方にも差し上げることができます。

ゾーンシステムについて聞かれた場合や、会員勧誘に便利です。ぜひ御活用ください。

なお、制作は会員の三浦さんにお願いして 2000 部が完成。昨年 9 月例会で会員に配りました。



ゾーンシステム研究会
Photographic Society of **Zone System**

連絡先／Contact

ゾーンシステム研究会(代表:写真家・中島秀雄)は大判カメラを用いた銀塩ファインプリントを探求するため1995年に作られました。
約40名の会員が、撮影から現像、プリントまでの暗室作業に取り組んでいます。
月例会は原則として毎月第2土曜日の午後2~5時に行っています。
見学ご希望の方は、お気軽にお問い合わせください。

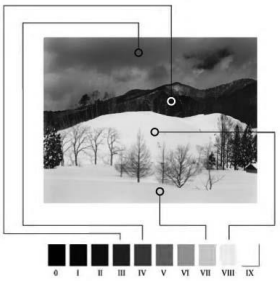
Photographic Society of Zone System (Representative: Hideo NAKAJIMA, photographer) was founded in 1995 to pursue fine silver gelatin prints using large format cameras.
Our group consists of about forty members, and we work in a darkroom developing and printing after photo shoots.
Meetings are held on the second Saturday, 2 to 5 pm every month.
Please feel free to contact us if you would like to visit.

e-mail: zonesystem.adm@gmail.com (事務局)
website: http://zonesystem.tokyo/
tell: 090-4933-7209 (代表:中島秀雄)

ゾーンシステムとは／About Zone System

ゾーンシステムは、アメリカの写真家アンセル・アダムスが確立した伝統的、かつ極めて実践的な写真制作の技法です。
どんなに強い光線も、写真の上では印画紙の白以上に白く表現することはできず、また、どんなに暗い穴や深い谷も、印画紙の黒より黒くすることはできません。これが白黒写真の世界です。しかし、現実の世界のトーンは写真で表せるトーンよりもはるかに幅が広いです。そこで、ゾーンシステムでは、自分のイメージをできるだけ的確に、かつシステマチックにプリント上に再現するために以下のように考えます。
まず、印画紙に表せる黒・グレー・白の連続する階調を区切って10段階となるように調整します。このトーンステップの各段階にローマ数字を付して「ゾーン」と呼びます。ゾーン0は最大濃度の黒、ゾーンVは中間のグレー、ゾーンVIIIはほんのわずかにトーンが見える程度、ゾーンIXは印画紙自体の白です。そしてスポット露出計を使って被写体の明暗をゾーンに関連づけながら適正露出を決めていきます。

The Zone system is a traditional and highly practical photographic technique established by American photographer Ansel Adams.
No ray of light can be expressed brighter than the white of the photographic paper, and no dark hole or deep valley can be expressed darker than the black of the photographic paper. Actually, this is the limit of black-and-white photography. There are, however, many levels of light and dark in the real world, and the range of tones is much greater than the range of tones we can express in photographs. In order to reproduce our image on the print as accurately and systematically as possible, we believe the followings:



The continuous tones of black, gray and white on the photographic paper can be separated and adjusted to 10 levels. This Tone Step is called "Zone" with Roman numerals for each stage. Zone 0 is maximum black density, zone V is medium gray, zone VIII shows only a slight tone, and zone IX is maximum white, which is a photographic paper itself. We determine the appropriate exposure with a spot exposure meter by matching the light and dark of the subject to these zones.

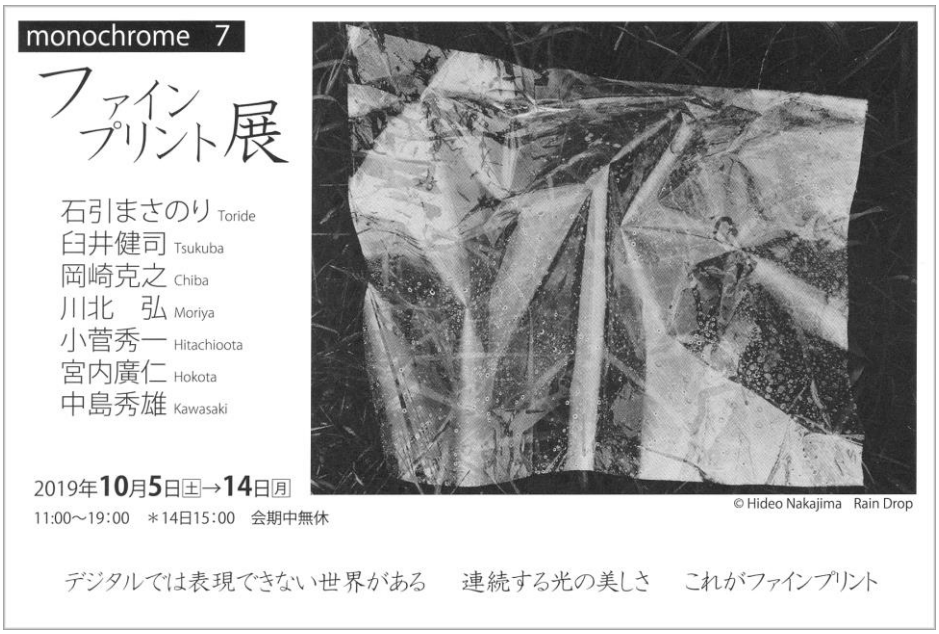
Information

[研究会有志グループ展]

昨年、以下研究会有志によるグループ展が開催されました。

昨今、このような会員による積極的な活動が目立っています。

南青山「ギャラリーストークス」にて（2019/3/6～3/11）



つくば市「gallery Y」にて（2019/10/5～10/14）

Information

［表紙の作品］

・作者：鈴木武志
・タイトル：宙（そら）
・フィルム：ネオパン SS
・フォーマット：6×6
・レンズ：210 ㎜
・絞り：f22
・シャッター：30 秒